

研究ノート

A 合唱団における自尊感情の変化について —中国地方の中高生対象の音楽教育活動から—

近藤 卓¹⁾・山崎 秀雄²⁾・田中 佑果³⁾・音井 美波⁴⁾

キーワード：自尊感情，中高生，合唱，音楽教育

1. はじめに

自尊感情には、社会的自尊感情 (SOSE; Social Self Esteem) と基本的自尊感情 (BASE; Basic Self Esteem) の二つの領域があるとされ、これらの領域を明確に分けて測定する尺度として、そばセット (SOBA-SET; Social & Basic Self Esteem Test) が開発されている (近藤, 2010)。

社会的自尊感情は、他者との比較で優れていることが確認されたり、勝負に勝ったり、称賛を浴びることによって高まる感情で、社会的な状況に依存した感情である。基本的自尊感情は、そうした他者との比較には無関係に、ありのままの自分を、自分は自分でしかないと丸ごと認め受け入れる感情で、いったん育まれると変化しにくい感情である。

つまり、社会的自尊感情を高めることは、社会的に評価されることで容易に達成できるが、基本的自尊感情を育むことは、それほど単純なことではない。近藤 (2010) によれば、この際有効なことは共有体験であるとされている。他者とともにさまざまな経験をする中で、一緒に笑ったり喜んだり、あるいは泣いたり苦しんだり、さまざまな感情を共有することを共有体験という。

そばセットによって測定した結果を、図に示したように4つのタイプに分けて考えると、対象児童生徒の自尊感情の特長が分かりやすい。自尊感情4つのタイプの特徴は、次のように考えられている。

・タイプ1 (SB) ; 社会的自尊感情も基本的自尊感情も高く、バランスが取れているので心配のないタイプで、全体的に自尊感情が安定していて大きく、一時的に社会的自尊感情がつぶれてもすぐに立ち直れるタイプである。

・タイプ2 (sB) ; 社会的自尊感情が低いものの、基本的自尊感情がしっかりしている、のんびり屋でマイペースなタイプである。社会的自尊感情は、本人を認めてあげる場を設定

1) 山陽学園大学総合人間学部生活心理学科

2) 島根県教育センター浜田教育センター

3) 山陽学園大学総合人間学部生活心理学科4年

4) 山陽学園大学総合人間学部生活心理学科1年

したり、成功体験を積むことで、高めることができる。

・タイプ 3 (Sb)；社会的自尊感情のみが大きく、基本的自尊感情が小さいタイプである。一見大きな自尊感情を持っていて心配ないタイプのように見えるが、社会的自尊感情の部分がつぶれたとき、例えば勝負に負けたり、怒られたり、失敗したりしたときなどに傷つきやすく、不安定になりやすいタイプである。このタイプの生徒は、頑張り屋で何事にも熱心に取り組んでおり、先生や友人からの信頼も厚く、親からも手のかからない子どもであると思われることが多い。そうした意味で、おとなからの援助や支援が手薄になりがちな、もっとも心配されるタイプであるといえよう。

・タイプ 4 (sb)；自尊感情が全体的に低く小さく、そのことが周りから見てもわかりやすいタイプである。「ほめる」、「出番を作る」、「役割を与える」といったかかわり方で、一時的に社会的自尊感情を高くすることができる。しかし、そうして社会的自尊感情を高めても、その効果はあくまで一時的なものなので、並行して基本的自尊感情をゆっくりと時間をかけて育てていく必要がある。ここで注意したいことは、社会的自尊感情を高めることだけに頼ってはならない、ということである。そうした対応を続けることで、社会的自尊感情に過度に依存する傾向が生じ、「目立ちたがり屋」「出たがり屋」「自己主張の強い、自分勝手に自己中心的な子ども」を生み出すことになりかねない。

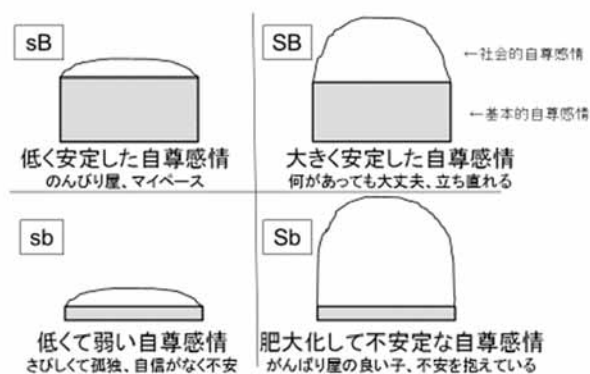


図1 自尊感情の四つのパターン

A 少年少女合唱団（以下 A 合唱団）の活動は、合宿や発表会を含めて 4 か月にわたって合唱による共有体験を繰り返すものであった。その結果、全体として基本的自尊感情が育まれ、発表会によって称賛を浴びることで社会的自尊感情も育まれるのではないかと考えられる。つまり、sb や Sb タイプの数が減り、SB タイプの数が増えると考えられる。

2. 調査の対象と方法

A 合唱団は、平成 28 年 10 月に結成された。「歌がたりない」という、ある女子中学生の言葉から生まれた、10 代の生徒たちが対象の合唱団で、13 歳から 18 歳の中学生、高校生が参加している。その数は総勢 80 名にのぼる。練習曲はハイスクールミュージカルより「We're All This Together」と合唱曲「未来へ」である。「We're All This Together」では本当のドラマさながら踊りながら歌うといった演出も行った。

A合唱団には、合唱経験がある生徒が多数みられる。一方、中には合唱経験が全くないという生徒や、不登校を経験した生徒、まわりの人とコミュニケーションをとることを苦手とする生徒もいる。そのため、指導者は小中高等学校の教員、教育センター職員、相談員などがおり、生徒たちが安心して参加できる環境づくりをしている。また、合唱経験者や上級生がリーダーとなり皆を指導し、まとめる役割を担っていた。A合唱団では、指導者がただ単に教えるというものではなく、生徒達で知恵を出し合い、お互いの出来ないところを補い合ったり、分からないところを教え合ったりして、切磋琢磨している姿が多く見られた。これは、かつて小学校であった縦割り班の活動のように、教える側の生徒にとっても、教えてもらう側の生徒にとっても学びの場となっていると感じた。指揮者には栗山文昭合唱団で活躍したのち、プロの指揮者として独立し活動している、横山琢哉氏を迎えた。

A合唱団のコンセプトとしては、ベネズエラのオーケストラ「エルシステマ」やブラジルのパーカッション集団「オロドゥン」のように、音楽により地域の子どもが生き生きと育つ環境づくりをするというものである。

表1 練習日程

日付	時間	備考
平成28年 10月16日(日)	13時30～ 16時30分	練習初日 SOBA-SET(事前調査)実施
平成28年 10月30日(日)	13時30～ 16時30分	
平成28年 11月3日(木)	13時30～ 16時30分	
平成28年 12月4日(日)	13時30～ 16時30分	2会場に分かれて練習
平成28年 12月26日(月)	14時～ 18時	合宿練習
平成28年 12月27日(火)	9時～ 15時15分	合宿練習 SOBA-SET(事後調査)実施
平成29年 1月8日(日)	9時～ 13時15分	発表会本番

練習日程は表1の通りである。なお、12月26日・27日においては宿泊研修施設にて合宿を行い、生徒同士、生徒と指導者の親睦を深めることができた。26日の夜には、指導者の補助として参加していた大学生による30分間のミニライブがおこなわれ、歌の合間に自らの体験を生徒たちに語る場面もあった。一緒に歌ったり、手を叩いたりする生徒や、涙を流しながら聞いている生徒もみられた。肩の触れ合う距離で生徒同士の共有体験がなされたひと時であったといえる。

毎回の練習内容としては、①仲間づくりタイム②発声練習③パートに分かれて練習④全

体練習というような内容である。①の仲間づくりタイムとは、導入として、じゃんけん大会や自己紹介などレクリエーションを取り入れたものである。様々な学校から来ている異なる学年・年齢の生徒たちが関係づくりをできるきっかけとなるように、心と体を解きほぐすために設けられた時間である。

生徒と指導者は一丸となって、1月8日に開催される合唱の祭典で歌うという目標に向かい皆で練習を重ねた。

そばセットによる測定は、2016年10月16日の活動開始時に1回目の調査(事前調査)を実施し、2016年12月26日、27日の合宿練習日の解散直前に2回目の調査(事後調査)を実施した。

3. 結果

事前調査には、合唱練習に参加した全員である39名が回答した。事後調査の時点では79名が練習に参加していたが、その内事前調査にも参加していた生徒つまり2回目調査に回答したものは29名であり、今回はこれら合計68名分のデータを分析の対象とした。

事前調査39名と事後調査29名のデータから、自尊感情の4タイプを計算し、それらを比較すると、表2と図1に示した通りとなった。

表2 そばセット調査・事前事後タイプ別比較
(第1回2016年10月16日・第2回12月27日)

	1回目	2回目
SOBA タイプ	N(%)	N(%)
SB	14(35.9)	13(44.8)
sB	16(41.1)	11(37.9)
Sb	2(5.1)	3(10.3)
sb	5(12.8)	1(3.5)
無回答	2(5.1)	1(3.5)
計	39(100.0)	29(100.0)

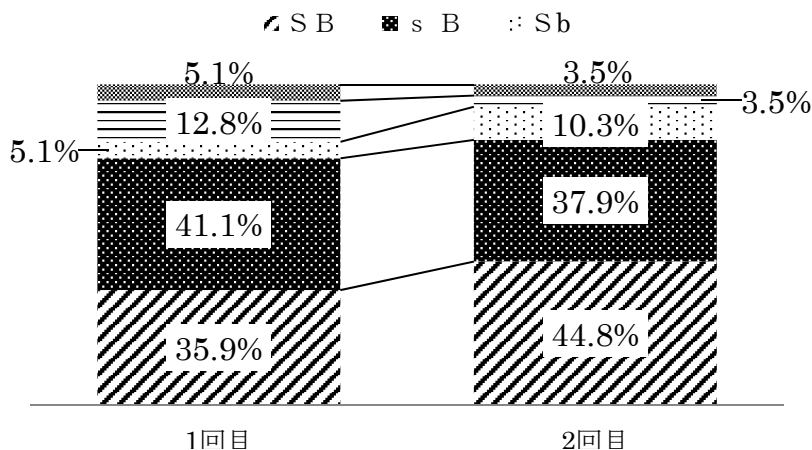


図2 そばセット調査・事前事後タイプ別比較

SB と sB という、基本的自尊感情得点の高い群を合わせると、第1回目の77.0%から第2回目では82.7%と増加している。とりわけ、SBタイプは、35.9%から44.8%へと大きく増加している。一方で、Sbは5.1%から10.3%へと倍増しているが、sbは12.8%から3.5%へと3分の1となっている。

4. 考察

1) SBタイプの増加について

SBタイプの比率が、高まる結果となった。集団活動においては共有体験を通して、自らの役割に気づいたり、支持あるいは称賛されたりする中で、自己有用感や自己有能感あるいは自己効力感が育まれることが起こり得る。これらの感情が高まることで、間接的に社会的自尊感情を育むと考えられている(近藤, 2015)。こうしたことから、sBタイプは減少傾向を示し、その分バランスのとれたタイプであり、より望ましいタイプとしてのSBタイプの増加につながったのではないかと考えられる。

2) sbタイプの減少について

一方、sbタイプは12.8%から3.5%へと激減した。このことは、明らかに共有体験の効果と考えられ、合唱練習の過程でともに歌い笑い、さらには合宿練習で汗を流したり涙を流したりしたことが影響を与えたのであろう。

社会的自尊感情も基本的自尊感情も低いsbタイプは、日常の学校生活の中でまず最初に心配される子どもたちである。何事にも自信が持てず、引込み思案となりがちで、集団の中で目立たず陰に隠れたような、存在感の薄い存在である。そうした子どもの割合が、3分の1に減少したということは、注目すべき効果であるといえよう。

3) 今後の課題について

今回の調査は対象数が少ないことが、まず第1の限界性として挙げられる。中学1年生から高校3年生まで6歳の差がある集団でありながら、事後調査では29名と絶対数が少ない。そのため、4タイプに分けると各群は数名にしかならない。結果を見ても、Sbが事前の5.1%から10.3%へと倍増しているが、実数は2名が3名に増えたということであり、統計的に見れば検討するには不十分な数であろうと考えられる。

今回の調査は、事前調査と事後調査でそれぞれ個人を特定する(連結可能匿名化)ようにはなっていない。したがって、個人の変化を踏まえて、全体の変化を議論することができないという限界がある。

対照群を置いた介入研究ではないので、得点の変化がA合唱団の活動によるものである、といった結論を得るには証拠が不足している。中高生にとっては、学校行事やクリスマスなどといった、家庭や地域社会での体験や社会の動きなどの影響も、少なからずあると考えられる。

こうした考察を踏まえて、今後は対象数を増やすこと、個人特定ができる形式をとること、対照群を置くことなどで、A合唱団の活動が自尊感情に与える影響について、より明確な議論が可能になると考える。

【文献】

近藤卓（2010）. 自尊感情と共有体験の心理学. 金子書房

近藤卓（2015）. 乳幼児期から育む自尊感情. エイデル研究所